



門構えの景

門は数寄屋風で、材は佐渡のアテビである。門をくぐるとすぐに両脇の違った景色が目飛び込んでくる。一方は低い石積みの中にヤマボウシやヤマモミジを自然風にあしらった景、他方は御簾垣で囲われた坪庭の景である



玄関アプローチ周りの景

アプローチ周辺は、敷き砂によって広々とした枯れ山水を思わせる庭園になっている



林園へ向かう園路の景

玄関アプローチ脇から数枚の飛び石を伝い林園に向かうと、そこは自然風景庭園だ。この庭園は、緩やかにカーブする園路で構成されていて、さまざまに変化する沢流れの景色を見ながら全体を回遊できるようになっている

はじめに

今、ガーデンブームが世の中を一世風靡しており、庭いじりがとても身近な話題の1つになってきている。そして、多くの人が「お庭に愛らしい色とりどりのお花をたくさん植えて、そこでアフタヌーンティーでも楽しみたい」と考えているようだ。

これは、例えばどんなに小さなお庭でも美しく整えて、そこでちょっとしたひと時を気分よく過ごしたいという、言わば現代人が欲求の場を持ちたいという欲求の表れであり、庭という身近な自然と人間の関りが気楽なライフスタイルとなって定着してきていることをよく物語っている。

庭は、人にとって最も身近な自然環境であり、プライベートな日常生活の場であり、自分のセンスの自由な表現の場でもある。そして、その場が庭として成立するためには好みや素材や敷地条件ばかりでなく、時代の感性が深く関っている。

この点から言えば、現代の庭は「見る」対象から「使う」対象にシフトし、さらに庭いじりという実体験を通して生命の大切さや相手を思いやる気持ちの大切さに気付いていきながら、さらには学びの心を育てて自分自身も癒されていくといった、まったく新しい時代価値を持つに至ったと言えるだろう。

移りゆく時代の流れのなかで「現代」という時空間を、この緑水荘庭園に素直に刻むことが作庭者自らに求められた使命であり、とても大きな課題であったことをここに記し、現代が求める庭のかたちの1つとして平成15年7月に約2年余りの年月をかけて緑水荘庭園は誕生した。